メトロポリタン史学会会報

第３号(2006.8.1)

発　行　メトロポリタン史学会

今年度をメトロポリタン史学会の本領発揮の年に

会長　　佐　々　木　隆　爾

昨年四月に誕生したメトロポリタン史学会は、今年四月二十二日の総会をもって満一年を迎えました。本学会は、この一年で学会としての基礎も固まり、また歴史学界の新星として多くの歴史家の関心を呼ぶ存在に成長いたしました。まず、このことを会員の皆さんとともに喜びたいと思います。そうして、このような活動を支えてくださった委員各位に心から感謝を申し上げます。

学会としての基礎が固まったと申しますのは、会員数が会誌『メトロポリタン史学』の発行など会の運営に必要な経費を支えることのできる規模を、はるかに超えたことであります。昨年の創立総会で立てた会員拡大目標は一五〇名でしたが、木村事務局長の報告によりますと、これが超過達成され、本会は力量の面でも財政の面でも安定的な成長軌道に乗ったことが確認されたのであります。

また、「歴史学界の新星」と申しますのは、『メトロポリタン史学』の創刊に対し、現代日本の歴史学界をリードしている人々が多大の関心を寄せてくれているという事実を指しております。たとえば私が出講している日本大学史学科では、本誌が早速図書室に配架され、学科主任の土屋好古さんからお祝いの言葉をいただきました。本誌は約八〇の大学や研究機関に寄贈されたのですが、それぞれの場所で日大史学科の場合と同じような反響を呼んでいることと想像されます。私たちには、本誌に注がれる熱い視線に応え、今後、本誌を新たな学問的成果を発表する場として育成する必要があると痛感する次第です。

今年度の私たちの課題は、一年目のこうした成果を引き継ぎ、自覚的に飛躍をはかることに尽きると思います。私たちの学会は実に豊富な人材を擁しております。まずはこれらの優秀な人材の間で、最も良くできた作品を『メトロポリタン史学』に寄稿するという気風を育てる必要があろうと思います。とくに問題提起的な論考、新機軸を出した野心的な論文や研究ノートは、ぜひ本誌にお寄せいただきたいと思います。また、博士論文を完成された方は、その核心部分を本誌に発表するという慣例を築きたいものと思います。さらに、新しい学問的潮流の創出をめざすシンポジウムや対談・討論などを企画・掲載していただきたいと思います。こうなれば、わがメトロポリタン史学会は、新星として一層の光芒を放つようになるに違いありません。

本会はまた、現在の学生諸君など若い世代にファンをつくるよう努力すべきだと思います。まずは談話会から引き継ぐ予定の史跡見学会を、新鮮さを持ち、楽しい語り口で話される現地講演会にしてはどうでしょうか。講師も専門家・新進の研究者・教師など多様な顔ぶれになれば、すばらしいでしょうし、見学会に限らず、このような講師陣で一般向けの講演会を開くのもよいかも知れません。

新年度を飛躍の年にするために、会員の皆さんの一層のご協力をお願いいたします。

メトロポリタン史学会第二回総会・大会報告

４月２２日（土）に、首都大学東京（東京都立大学）９１年館多目的ホールにおいて、メトロポリタン史学会の第二回総会・大会が開催されました。参加者は４０名でした。

午前１０時、小谷汪之氏を議長に選出して総会が始まりました。２００５年度活動報告、決算報告、監査報告が順次報告され、承認を得たあと、２００６年度活動方針案および予算案が提案され、それぞれ採択されました（６～８頁参照）。討論では、談話会の活動を引き継ぐことなどが要望として出され、今年度は秋の企画をメトロポリタン史学会として実施する予定であることが報告されました。なお、今回は２年の任期途中にあたるため、委員の選出を行われませんでした。

午後は、「歴史教育と歴史認識：現場からの報告」をテーマにシンポジウムが開かれ、充実した報告と討論が行われました。内容は以下の通りです。なお報告は会誌『メトロポリタン史学』第二号（2006 年 12 月刊）に掲載の予定です。

久保田貢氏（愛知県立大学）「子ども・若者の戦争認識とその背景」

谷本秀樹氏（埼玉県立鳩ヶ谷高校）「歴史認識の形成と学校―埼玉の高校から―」

江里　晃氏（実践女子学園中学高等学校）「歴史教育を現代社会ら考える」

鳥越泰彦氏（麻布学園）「日本における世界史認識の特徴―海外との比較から―」

木村茂光氏（東京学芸大学）「日韓歴史共通教材作成に向けて－８年間にわたる韓国ソウル市立大学と東京学芸大学の共同作業―」

糟谷憲一氏（一橋大学）「日韓歴史共同研究を素材に、歴史認識に関わる交流の課題について考える」

そして午後 6 時からは、会場を９１年館食堂に移して、懇親会が行われました。３０名をこえる参加者全員が近況報告や今後の抱負を述べるなど、和やかな雰囲気の中で交流を深めました。

【大会参加記】

参加記

大町 健

第二回メトロポリタン史学会大会のシンポジウムは極めて盛りだくさんであった。教育学から久保田貢氏は、現在の子どもたちの現状が歴史認識を困難にしている現状を報告され学ぶ点が多かった。谷本秀樹氏・江里晃氏の高校の現場での子どもたちの歴史認識と現場の状況について具体的な報告であった。両氏の報告は、それぞれの困難とそれを克服使用しての活動や葛藤が目に浮かぶようであり、また多くの点を考えさせられた。鳥越泰彦氏の日本の世界史教育を外国の事例との比較して、現在の日本の歴史教育がこれまでの成果を受け継ぎそれなりの到達点にあることを報告された。多くの点で学ぶと共に、われわれはともすると困難に目がいき到達点を忘れがちな私などには良い反省をさせて頂いた。木村茂光氏と糟谷憲一氏は、それぞれ日韓の歴史研究者との共同研究についての報告は、歴史教育と歴史学の成果という内容の違いや共通教材をめざすか、交流に徹するかなどの違いはあっても、実際に日韓の研究者の共同研究を積み重ねたことの重みを実感させる報告で圧倒された。

今回の諸報告は、歴史認識にむけた実践がリアルに語られることに成果があったと思う。しかし一方で、そのリアルさが現状の一面だけを切り取ってはしないかとの危惧を覚えた。我々は、認識を強調しようとして、ともとすれば子どもたちの困難な状況のみを切り取ってしまうという、ステロタイプな認識に陥ることがあるのではないだろうか。討論の中で、報告者自身がもっと展望を語るべきであったと述べられたことに同感する。しかし、討論を含めて、学ぶ点考えさせられる点の多かった大会であった。また趣旨説明にもあったが、教育現場に多くの卒業生を排出してきた大学の史学会として時宜にあったものであったと思う。また、シンポジウムの後の懇親会も、家庭的で母校に帰ってきたという実感のあるのだった。この大会を準備頂いた諸先生、また報告者の皆さん、また事務を担当していただいた在校生の諸氏に感謝したい。

この大会が意義深いものであればあるこそ教育現場にいる諸先輩や同級生、後輩諸氏の顔が浮かんできて、誰も彼もいればもっと議論の花が咲き、深まっていったのではないかと思うと、残念であった。この新学期が始まったばかりの忙しい時期では無理なのではと時期の再検討をお願いしたいとも思ったが、今の学校現場ではそれではどの時期ならその時間が取れるかと思うとその提案には躊躇した。（これは先程私自身が書いた、困難を強調するステロタイプな思考かも知れませんが）

「歴史教育と歴史認識――現場からの報告」参加記

角田三佳

私が都立大学に入学したのが一九八二年でなければ、今回のシンポ「歴史教育と歴史認識：現場からの報告」に参加することはなかったかもしれない。歴史はあくまで勉強の対象で、その際の歴史イメージは前近代。それが、サークル「現代史研究会」（顧問は佐々木隆爾先生）と出会い、入部したとたんの「進出／侵略問題」との遭遇。おまけにその部には家永教科書裁判を支援する学生組織があり…。偶然と必然が交差するなかで、やがて私は出版労働者をめざすようになり、そして今、青木書店編集部に席を置いている。

そのような私が今回参加した最大の理由は（消極的な理由は、あんまりごぶさたでは委員としてマズイというものだが）、歴史教育と歴史認識を前面に掲げた本が近年（90 年代以降、とりわけ家永教科書裁判が結審後）だされなくなっている一方で、日本人の歴史観が問われる場面が多くなっている状況に対して、意味ある（かつ売れる）書籍刊行の可能性を探りたい、ということだった。

結論から言えば、そのような書籍の出版は現状では相当に難しい、というのが報告を聞いての実感だ。

歴史教育を考える場合、「現場」の状況抜きにはありえないが、今回報告された現場とは、朝令暮改的「教育改革」の対応に追われ、管理強化のなかで疲弊する教師、そして若者たちにとっては、「勝ち組」をめざせる「上層」にはクリアすべき対象、「負け組」と自認した者たちには無意味で自分とは関係ないはずの勉強に、しかしながら枠づけされてしまう日々、いずれも＜戦場＞ともいえる殺伐とした日常のなかで、生きがたい今を生きている現実だ。

ここには、教科教育が「純粋に」成立する基盤はない、もしくは、きわめて困難なものとしてしかない。

他方の歴史研究の側からの報告は、互いの歴史観を問いなおし、そのうえで歴史認識を共有していこうとする日韓のプロジェクト。その議論は、日韓双方の歴史研究を豊かにし、ひいては歴史教育を豊かにするものだろうと思われる。だがしかし、教育の場の現実と研究の場とのこの＜乖離＞――。

ネットやマンガなど若者たちに影響力の大きい媒体をとおして、「自分たちとは関係のない過去を持ち出してきて文句を言うな」といった意識が広がっている現状を見聞きするにつけ、むしろ今こそ両者が手をたずさえての仕事はきわめて必要だと思いつつ、いったい、どのような言葉・記述がこの乖離を埋めることができるのか、着地点は見えない…。

ただ、こうも考える。

高校の日本史の授業第一日目に、「教科書に『進出』とあるのは間違いですから『侵略』と修正をしてください」。そう言った先生の言葉の意味が、ようやくわかった一九八二年。個人的な経験ではあるが、歴史を自らのものと意識する機会は、意外な巡り会いのなかにある。とすれば、歴史意識の形成に向けた「種まき」を諦めるわけにはいかない。さて、何ができるだろうか。せっかくのこの機会――どなたか、いっしょに本つくりませんか？

メトロポリタン史学会第２回大会
シンポジウム　歴史教育と歴史認識　聴講の記

萬城 まり子

今回のシンポジウムの感想をひとことで言ってしまうと、各報告の論点がうまくかみあっていなかったような気がしています。聴く立場の者としては、どこに定点を置いて聴いたらよいのかとても困ったということです。

私自身は神奈川県立高校で社会科を教えている者なので、各報告者のレポートにはそれぞれ関心があります。しかし、多様化して混乱している現在の教育の問題を、一度に論じられてしまうと、先述したようなした気持ちになってしまうのです。

現在神奈川県立高校では、かなり強権的画一的に「観点別評価」という制度を導入してきています。すでに、義務教育では行われていると思いますが、生徒の「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」について評価を出していくという制度です。しかもその評価の公平性・公開性を高めるということで、各科目の単元ごとにどこを評価していくのかという基準までつくらなければいけないそうです。４０人クラスの生徒を相手に週１５時間以上の授業をしている教師が、いちいちそんな評価出している時間があるわけないだろっ！というのが本音です。理想はわかるけれど、まったく非現実的な改革だと思います。

そういう問題に直面している者としては、「日本の教育にはもっと技能を育てるという側面があったほうがよいのではないか」という鳥越さんや、「評価方法の変更」を提唱する江里さんに、「ではどのような方法が現実的にできるでしょうか？」ということを訊いてみたい。実際に訊いたらよかったのかもしれない。しかしその前に、今自分が直面している現場の状況等の説明を抜きにしては、うまく意思疎通が図れないと思いました。教育現場が抱える問題とは、いつも非常に個別的なのです。今回のシンポジウムではそうした時間があまりとれないと思いましたし、組合の教研集会のような形になるのも、私としてはあまり望まなかったのです。

私自身が今回の報告でもっと時間をかけて聴いてみたいと思ったのは、木村さんの「日韓歴史共通教材作成に向けて」という報告でした。私が日本史の中であっさりと教えている「高句麗」「後期倭寇」といった概念が、韓国では難しい問題をはらんでいるのだという指摘が新鮮でした。現実の日韓関係は、いつ

も何らかのトラブルを抱えていますが、こうした相互交流がもっと広く知られるべきだと感じました。

多様化した教育現場に生きる者としては、今回のシンポジウムのような様々な場に参加して、認識を深めていきたいと思っています。しかし、なかなかまともな研修の場も得にくい昨今、メトロポリタン史学会は数少ない貴重な場です。運営されている方々、報告された方々に深く感謝申し上げます。

【歴史随想】
『ブリュージュ－フランドルの輝ける宝石』の刊行に寄せて

河原　温（首都大学東京・都立大学、西洋史）

本年５月末に、中央公論新社より小著『ブリュージュ』（中公新書）を上梓する機会をえた。本稿では、手前味噌で恐縮であるが、本書執筆の背景をこれまでのわたしのベルギー体験を通じて、披瀝させていただきたいと思う。

本書は、ベルギーのフランドル地方で中世以来栄えた商業都市であるブリュージュ（ブルッヘ）について叙述した＜都市の歴史＞の試みである。そもそもベルギーは、ヨーロッパの大国の影に隠れて日本では比較的なじみの薄い国であろう（クラブ・ブリュージュはサッカーの世界では最近有名らしいが）。しかし、すでに明治維新期に欧米各国を歴訪した著名な『岩倉使節団』が、ベルギーにも 8 日間（1873 年 2 月）滞在しており、久米邦武による貴重な観察が残されている（『米欧回覧実記』第 3 巻、岩波文庫）。残念ながら同使節団は、ブリュッセル、リエージュ、アントウェルペン、ヘントを訪れたのみで、産業革命を大陸で最初に実現した国であるベルギーの工業化の粋を専ら見学したようであり、当時のベルギー社会内部における宗教的（カトリック派と自由派）、党派的（カトリック党と労働党）、言語的（フランス語とオランダ語）、階層的（ブルジョワと労働者）対立、急激な工業化のもたらした都市問題等に由来するベルギー社会の亀裂・苦悩までは観察が行き届かなかったようにみえる。もっとも時代的状況からいえば当然といえるかもしれないのであるが。

岩倉使節団訪問から 130 年をへた今日、EU の政治的中心都市ブリュッセルを擁し、日本からも古楽演奏やバレー、ファッションなどを学ぶ留学生や観光客がそれなりに訪れるようになったベルギーではあるが、この国の抱える複雑な歴史的背景は、今日においてもわが国では十分理解されているとはいい難いように思う。その中で、古都ブリュージュは、ベルギー有数の観光都市としてわが国でも知られるようになり、訪れる日本人も多くなってきたようである。

わたし自身はといえば、1979 年以来四半世紀にわたってベルギーを訪れてきた。80 年代前半には、ヘント大学の留学生として 2　年あまりを過ごし、この地域（ベルギーのオランダ語圏であるフランドル地方）の歴史を専攻するようになったのであるが、20 代だったその当時はまだ、オランダ語圏とフランス語圏（および少数のドイツ語人口）からなる複合国家ベルギーの歴史的背景を十分に把握していなかったように思う。

ヘント大学はオランダ語系の大学であり、留学時代はオランダ語の聞き取りに苦労させられた。東京の日蘭学会で短期間オランダ語の基礎は学んでいったが、聞くこと、話すことは別であり、ヘント大学で開かれていた夕方の語学コースと大学で知り合いになったベルギーの友人たちのおかげで、２年間のうちにいくらか上達したというところである。日本の大学院で中世ヨーロッパの都市史を勉強していたわたしの

関心は、留学時代から中世都市ヘントの社会史に向かい、80 年代後半から 90 年代の前半はもっぱら施療院や兄弟団といった都市ヘントのミクロな社会組織の研究から中世都市を理解しようと試みていた。
その後 90 年代半ばから、ヘントと並ぶフランドルの大都市で、中世ヨーロッパ最大の国際商業都市であったブリュージュの街の魅力に惹かれるようになり、文書館にも通うようになったのである。もともとブリュージュにも 12 世紀から知られる施療院（聖ヨハネ施療院）があり、その文書を調べるために 80 年代にも何回かブリュージュに通っていたのであるが、当時はまだこの都市のもつ奥深さが見えていなかった感がある。その後フィレンツェをはじめとする中世・ルネサンス期のイタリア諸都市の魅力にも惹かれながら、アルプスの北において唯一、南欧諸都市に対抗しえた「水の都」であり、15 世紀には、フランスのブルゴーニュ公による支配のもとで宮廷の所在地ともなった華麗なゴシック文化の街ブリュージュの歴史的魅力が、わたしの中で大きくなっていったのである。ヤン・ファン・エイクをはじめとする初期フランドル派絵画制作の中心地であったことも美術好きのわたしを魅了した。また、その間『スイス・ベネルクス史』（森田安一編、山川出版社、1998 年）の執筆者に加えていただき、近世から近代のベルギーの歴史を読み直す機会を与えられたことも、ベルギーという複合国家の中でフランドル地方およびブリュージュの歴史的位置を考える上で、貴重な体験であった。
　今回中公新書の一冊として、ともかくも都市ブリュージュの歴史を一書にまとめることができて、ほっとすると同時に、新書としては珍しくカラー口絵も多く入っている本書を手にとり、ブリュージュにこれから行ってみようかと思われる方が一人でも増えることを願っている。

メトロポリタン史学会第２回総会議案書 2006. 4.22

メトロポリタン史学会　２００５年度活動報告 2005.4～2006.3

１．会誌『メトロポリタン史学』第１号を２００５年１２月に刊行し、史学科のある大学を中心に約８０機関に寄贈した。
２．書評会を２回実施した。
・2005 年 7 月 18 日
　松本彰・立石博高編『国民国家と帝国』（山川出版社、2005 年）　参加者１７名
・2006 年 1 月 28 日
　小谷汪之編『歴史における知の伝統と継承』（山川出版社、2005 年）　参加者１５名
３．第１回秋季シンポジウム「歴史における人の移動とネットワーク」を、2005 年 11 月 26 日（土）に、首都大学東京国際交流会館大会議室において実施した。　参加者約３５名
４．秋季シンポジウムの報告集を、叢書の形式で桜井書店から出版することを決定した。
５．第２回総会・大会（２００６年４月）の準備を行った。
６．会報１号（2005.6.23）、２号（2005.10.28）を発行した。
７．会員拡大目標（１５０名）を達成した。
８．都立大学歴史学研究室談話会が解散準備に入ったことを受け、談話会の活動を引き継ぐことを検討した。

メトロポリタン史学会　２００６年度活動方針 2006.4～2007.3

１．会誌『メトロポリタン史学』第２号を２００６年１２月に刊行する。
２．研究会・書評会等を実施する。
３．第２回秋のシンポジウムを２００６年１１月２５日（土）に行う。
４．第１回秋のシンポジウムの報告書を桜井書店から出版する。
５．第３回総会・大会（２００７年４月２１日）の準備を行う。
６．１８０名を目標に会員拡大に努め、会財政の確立を図る。
７．都立大学歴史学研究室談話会の活動を引き継ぐことができるよう、談話会と連絡・調整を行う。

メトロポリタン史学会　２００６年度委員名簿 任期：2005.4～2007.3

会　　長：佐々木隆爾
副　会　長：峰岸純夫、峯岸賢太郎、増谷英樹、青木哲夫、小谷汪之
事　務　局：木村誠（事務局長）、赤羽目匡由
編　　集：河原温（責任者）、奥村哲、佐々木真、澤田秀実、新村恭、月脚達彦、福田千鶴、山田朗
企画・研究：中野隆生（責任者）、小野昭、角田三佳、川合康、趙景達、橋谷弘、林田伸一
監　　事：立石博高、木村茂光

メトロポリタン史学会　２００６年度予算 2006. 4. 1～2007. 3.31

〔収入〕　９４８，３５５円

前年度繰越金			１１１，３５５円
会　　費			８３７，０００円
一般会員	5,000円 × 140人		７００，０００円
学生・院生	3,000円 × 18人		５４，０００円
未収分	5,000円 × 16人 3,000円 × 1人		８３，０００円
合　　計			９４８，３５５円

〔支出〕　９４８，３５５円

会誌制作費			５００，０００円
郵便料金			１２５，０００円
会誌郵送	180円 × 250件	４５，０００円	
大会案内・会報等発送		４０，０００円	
はがき・切手		４０，０００円	
事務用品代			３０，０００円
賃金・旅費			５０，０００円
予備費			２４３，３５５円
合　　計			９４８，３５５円

メトロポリタン史学会　２００５年度決算報告 2005.4～2006.3

〔収入〕

			2005 年度予算	2005 年度決算
会　　費			730,000 円	659,000 円
	2005 年度	(現　　金)	―　円	187,000 円
		(銀　　行)	―　円	202,000 円
		(郵便振替)	―　円	255,000 円
	2006 年度	(現　　金)	―　円	0 円
		(銀　　行)	―　円	0 円
		(郵便振替)	―　円	15,000 円
雑　収　入			―　円	2,002 円
	シンポ懇親会余剰金		―　円	2,000 円
	銀行口座利息		―　円	2 円
計			730,000 円	661,002 円

〔支出〕

			2005 年度予算	2005 年度決算
会誌制作費			500,000 円	365,400 円
郵便料金			106,000 円	117,102 円
	会誌発送		48,000 円	45,322 円
	大会案内・会報等発送			38,980 円
	はがき		48,000 円	15,500 円
	切手			17,300 円
	その他		10,000 円	―　円
事務用品代			30,000 円	20,038 円
アルバイト賃金			50,000 円	15,000 円
雑費			―　円	32,107 円
	振込手数料		―　円	420 円
	振替用紙印字サービス		―　円	1,100 円
	大会打合せ旅費		―　円	22,000 円
	大会用お茶・コップ		―　円	1,072 円
	大会懇親会赤字補填		―　円	7,515 円
予備費			44,000 円	―　円
次年度繰越金			―　円	111,355 円
	現金		―　円	16,595 円
	銀行		―　円	860 円
	郵便振替		―　円	93,900 円
計			730,000 円	661,002 円

○会員数　152 名（一般 136 名　学生・院生 16 名）

○会費納入率　138/152=88.2 %

本会では、会員の皆様の積極的なご寄稿をお待ちしています。広く、歴史研究・教育の諸領域にかかわる内容のものを求めます。

『メトロポリタン史学』（The Metropolitan Shigaku）投稿規定

(1) 本誌は、年一回 12 月に発行するものとし、原稿の締切は、毎年 8 月末日とする。

(2) 投稿資格は、原則として会員に限る。ただし、編集委員会からの依頼原稿に関してはこの限りではない。

(3) 投稿言語は、日本語または英語とする。

(4) 投稿原稿は、歴史学・考古学、歴史教育の分野に関する以下の種目のものとする。

①論文（図表を含み、24,000 字以内；英文の場合は、8,000 語以内）

②研究ノート・史料紹介（同　12,000 字以内；英文の場合は 4,000 語以内）

③学界動向（8,000 字以内；英文の場合は 2,700 語以内）

④時評・提言（4,000 字以内）

(5) 論文、研究ノート（縦書き、横書きいずれも可）には、欧文で要旨（300 語以内）を添付する（原文が英文の場合は日本語要旨 800 字以内）。また目次用の英文タイトルを付記する。

(6) 原稿は、編集委員会が採否を決定する。その際、論文、研究ノートについては、編集委員会および編集委員会が委嘱した査読者の審査を経る。

(7) 著者校正は、初校のみとし、校正時における文章の大幅な変更は認めない。

(8) 注は、末尾にまとめる。

(9) 原稿は原則として、印字された原稿（表、図表を含む）3 部、フロッピーディスク及び別記送り状*（1 部）を提出する。

(10) 掲載の論文、研究ノート・史料紹介、学界動向については、別刷り 50 部を進呈する。

(11) 原稿の送り先、照会については、

〒 192-0397 八王子市南大沢１－１　首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系
国際文化コース（歴史・考古学分野）、河原 研究室気付
『メトロポリタン史学』編集委員会
Tel: 0426-77-2119（河原研究室）　Fax: 0426-77-2112
E-mail: kawahara@comp.metro-u.ac.jp（河原温研究室内）
SNC47077@ nifty.com（河原温）

＊送り状は学会ホームページ（http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/）からダウンロードしてご使用下さい。

第２回秋のシンポジウムのお知らせ

下記の要領で第２回秋のシンポジウムを開催します。詳細は後日改めてお知らせいたしますが、お誘い合わせのうえご参加下さるようお願いします。

2006年　メトロポリタン史学会　秋季シンポジウム
「いま社会主義を考える―歴史からの眼差し－」

日時：2006 年 11 月 25 日(土)、10 時～ 17 時 30 分
場所：首都大学東京（東京都立大学）　91 年館

報告者（およその報告内容）：

和田　春樹 氏	東京大学名誉教授	社会主義の系譜
平塚健太郎 氏	東京都立大学大学院	日本の初期社会主義
中嶋　　毅 氏	首都大学東京・東京都立大学	ソ連の社会主義
篠原　　琢 氏	東京外国語大学	チェコの社会主義
奥村　　哲 氏	首都大学東京・東京都立大学	中国の社会主義
栗原　浩英 氏	東京外国語大学	ベトナムの社会主義

シンポジウムの趣旨

今日から見れば、社会主義体制は 20 世紀特にその後半という、限られた時代の歴史的産物でしかなかったことが、すでに明白になっている。物心がついたころにはベルリンの壁もソ連ももはや存在していなかった、そんな若者たちが大学生となる現在、かつてのイデオロギーから離れて、社会主義の歴史的意味を冷静に探るべき時が来ているように思われる。

とはいえ、社会主義体制が掲げたマルクス主義を含む、社会主義それ自体はまぎれもなく思想・運動であり、多くの人を捉え動かした。それなしには社会主義体制が成立しえなかったことは否定できない事実である。

20 世紀において、どのような状況の下で、どのような人々が、社会主義思想を受け入れ、再解釈していったのか？そこから、どのような運動が生まれ展開されたのか？そうした思想や運動と、現実に存在した社会主義体制はどのように関わっていたのか？また、今日から見て、そうした社会主義の思想・運動や社会主義体制は、どのような歴史的意味をもっているのか？
シンポジウムでは、そのような問題を考えてみたいのである。

メトロポリタン史学会委員会

秋の歴史散歩・予告

ご承知のとおり、都立大学歴史学研究室談話会が６月１０日の臨時総会で解散を決議しました。当学会では、談話会の解散をうけて、可能な限り談話会の活動を引き継ぎたいと考えておりますが、今年度は、さしあたり秋の企画を実施することを計画しております。まだ日時を確定するまでには至っておりませんが、これまで通り１０月８日（日）前後を予定しております。当学会の会員だけでなく、都立大卒業生や首都大在学生等にも広く呼びかけたいと思います。詳細は後日お知らせしますので、よろしくお願いします。

訃　報

次の会員の方がご逝去されました。謹んでお知らせするとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。

原田 一良　氏	２００６年2月１３日	肝臓癌
富田 徹男　氏	２００６年4月　８日	胃　癌
峯岸 賢太郎 氏	２００６年5月１１日	食道癌

【事務局からのお願い】

●新年度に入って３ヶ月がたちました。そろそろ2006年度分の会費をお支払い下さるようお願いします。また2005年度会費未納の方はあわせて２年分の納入をお願いします。納入に際しては下記の郵便振替をご利用下さい。一般 5,000 円、学生・院生 3,000 円です。

メトロポリタン史学会（会長　佐々木隆爾）
〒 192-0397
東京都八王子市南大沢１－１
首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系 国際文化コース 歴史・考古学分野内
TEL：0426-77-2110（木村誠研究室）
E-mail：mshigaku@comp.metro-u.ac.jp
ホームページ：http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/
郵便振替：00100-0-537287